

かささぎ通信 第67号

2018年 4月 13日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年三月の「森三郎の作品を読む会」では、
『森三郎童話選集かささぎ物語』所収の
「鼓大名」「帽子にばけたクロネコ」を読みました

「鼓大名」は、「かささぎ通信」第66号で紹介した「父」と同じく、単行本『雪ごんこんお寺の柿の木』（昭和18年12月）初出の作品です。鼓の上手な大名が、珍しい獣の皮で鼓を張り替えようと考え、奥方に「嘘の皮」を薦められ探しに行きます。途中で出会った「正直」という若者に「嘘の皮は世界中の女が一枚ずつ持っている」と教わり、この物知りの賢い若者を自分の跡継ぎにしようと、意気揚々と屋敷に連れ帰るといふ話です。屋敷に戻った大名は奥方に「嘘の皮を出してみろ」と迫りますが、「しりませんよ」と逃げる奥方に「やるまいぞやるまいぞ」と迫る大名という狂言仕立てで終わっています。

『赤い鳥』に掲載された森三郎作品には狂言「居杭」を元にした「あぐひ太郎」（昭和6年9月号）がありました。また「藤五三郎」（昭和7年9月号）も狂言を思わせる構成でした。

珍獣「嘘」の皮とは「川瀬（かわうそ）」をもじった言葉で「全くの嘘」の意味ですが、このような言葉遊びや笑に題材を得た作品は三郎さんの得意な分野ではなかったかと思えます。「嘘」と正反對の「正直」という若者の語った話こそ「大嘘」ですが、彼は「嘘の皮」を使つた女性の例を二つ挙げています。その一つは昔話「食わず女房」を元にした話で、「嘘の皮」で夫をくるくる丸めこんで、気づかれずにぼた餅を五六十個も食べてしまう話です。もう一つは唐の時代の話で、美しくおとなしい女を女房にした男が、やはり嘘の皮でくるくるまかれます。ある時、男は、誰も乗らなかつたはずの自分の馬が、朝になると体いっぱい

汗をかきあえていることに気付きます。「嘘の皮」の巻き方が十分でなかつたので、男は、おとなしい女房が夜になると馬を走らせ、山奥であやしい女たちと酒盛りをしている場を見せまいます。

二つめの話は、岡本綺堂の『中国怪奇小説集』（初版昭和十年）に掲載の唐の『宣室志』（作者・張説）に同じような話があります。「黒犬」が黒装束の男に姿を変え、夜になると馬に乗って出かけていく怪奇談です。岡本綺堂と言えば、森銃三が友人柴田宵曲（1897年〜1966年）の読書について書いています。宵曲は唐の古い随筆を読んでいるので、岡本綺堂の『半七捕物帳』の中の話でも、これからヒントを得たらしいなどというのを幾つも見出しているということです（『森銃三著作集続編』第六卷五一七頁）。その柴田宵曲は森三郎にとつて三重吉亡き後の第二の師と慕う人ですから、宵曲・三郎の会話の中に岡本綺堂の『中国怪奇小説集』の話もあつたかもしれません。銃三・宵曲・三郎のトライアングルを想像するだけでワクワクします。

「帽子にばけたクロネコ」は昭和24年刊行『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ他数篇』の表題作です。競馬で大損をした息子からどうしても三千円必要と言われたおじいさんが、金策に弟の所へ行きます。あわてたおじいさんは下駄箱の上のクロネコを帽子と間違えてかぶって行き、途中クロネコのお陰で三千円を手に入れました。折角だからと弟に会いに行くと、人の良いおじいさんは弟にその三千円を貸す羽目になってしまふという話です。話の中の「新円のおさつ」「悪性インフレ」などの言葉から、昭和21年3月から金融緊急措置令で漸次に新円に切り替えられた時代背景が分かるという指摘もありました。『値段史年表』（週刊朝日編）によれば、昭和23年の小学校教員の初任給が二千円（月俸）だったそうです。三月の「読む会」は、東京で空襲に遭つた三郎さんの戦時下の生活や、会員の聞いた刈谷の戦争中の話に発展して終わりました。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日）に刈谷市中央図書館で開催

平成30年5月11日（金）午後1時半〜3時半

「わらび餅」「めぐりあい」（『森三郎童話選集かささぎ物語』）